

松林院の陵(みささぎ)

伏見の松林院のすぐ東側に伏見松林院の陵(みささぎ)がある。後崇光または後崇光院として知られている伏見宮 貞成(1372-1456)は、室町時代(1336-1573)初期において、有望な皇族の一人であった。伏見宮の家系は4つある皇統の中で最も古く、正統な後継者が産まれない時には皇位を継承するのに相応しい血筋であった。

伏見宮三代目当主貞成は、崇光天皇(1334-1398)の孫で、伏見宮 栄仁親王(1351-1416)の息子であった。77年の間、貞成とその父栄仁は、皇位継承の正統性を争う南北朝紛争(1336-1392)で、北朝を支持する足利将軍家の支配の下で排除されてきた。しかし、彼の嫡男である、彦仁王(1419-1471)は1428年に後花園天皇として即位し、北朝内の紛争は終わりを迎えた。

貞成の遺産は、1416年から1448年に執筆された44巻から成る「看聞日記」に残されており、14世紀初頭の宮中の生活を類まれな眼識で捉えている。

.